The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	フィンランド木造建築と木の美について ： アールトの木の美学から21世紀の木造建築教育まで
Author(s)	小林, 文菜
Citation	デザイン理論. 2008, 52, p. 124-125
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53404
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

フィンランド木造建築と木の美について
── アールトの木の美学から21世紀の木造建築教育まで ──

小林文菜／大阪大学大学院文学研究科　文化表現論専攻博士前期課程　美学研究室

フィンランド共和国では，世界的に新素材の台頭，普及が著しかった前世紀を経て到達した今日の建築土壌において，「木」という伝統的な自然素材が，むしろ主要な建築資材として復権を果たしている。95年には，ヘルシンキ工科大学の建築学部に，21世紀に相応しい木造建築の可能性を，技術者ではなく建築家側から探求していくために，多角的な学習カリキュラムと実践の場を提供する，ユニークな集中教育プログラムが開設した。毎年の最終課題では，学生自らが，共同で代表設計案を煮詰め，木屑にまみれて建造作業を進めていくことで，実作品を竣工させる。常に素材との対峙を意識した実践的アプローチから，「木」に関する包括的な知識と技術，そして感性を備えるデザイナーとして建築家を育てていくことが，このプログラムの教育理念である。その教育成果は，修了後も木造建築を積極的に手がける若手建築家たちの活躍によって示されつつある。

このフィンランドにおいて，伝統的なイメージと結びつく「木造建築」が，近現代の新しい建築観との融合を果たした例は，さかのぼれば，モダニズム期を代表する同国の建築家，アルヴァ・アールトの個人思想と実践のなかにも，見出すことができる。アールトは，近代建築運動が盛んであった1930年代頭に，「合理主義の拡大」を主張し，非人間的なイメージに結び付けられる従来の合理化を批判した。すなわち，例えば自然界に存在する有機性に対して我々が感じる心地よさの要素とは，具体的に何であり，いかにしてそれを人間の生活空間に取り入れられるか，という思考のシフトこそ真に合理的であると考え，自身のデザインの実践にも応用しようと試みたのである。その一過程で彼が着目したのが，木という自然素材の応用価値であった。

アールトは，木が持っている，建築構造に新鮮な形態や技法を与えうる物質的特徴だけでなく，人間に精神的快をもたらす心理学的効果をも評価し，主に30年代の作品に木材を多用している。彼の代表作品である〈マイレア邸〉では，その集大成と呼べるほどに，本来の肌理や色味が尊重された多種多様な木造ディテールが，空間を特徴づけている。故に，マイレア邸から受ける印象は，あたかも人間の住居空間に再現された，生き物を守り育てる森のようであり，建築と住居者とが心地よく触れ合いながら，情緒豊かな生活を営む様子が想起されるのである。

木造というモチーフは，アールトの設計活動において結果的には永続しなかった。彼は，マイレア邸において極めて明快な表現で成功した，「有機的な自然界の模倣空間」というテーマを，以後は別の素材や空間構成の探求によって，より本質的に引き継ごうとするのである。しかし，彼が多様な表現の可能性を持った合目的的な素材として「木」を再評価し，新素材の台頭が著しい近代建築において，モダニズムの観念と「木」との調和を実現させたという点は，フィンランドの木造建築史における，新時代のエポックとして注目に値する。事実アールト没後，伝統から脱却した工法やデザインを用いた新鮮な木造建築が，国内で相次いで出現した。

ところでアールトは，1920年代後半から長

年にわたって，CIAMを通じて知り合ったラースロ・モホリ＝ナギと深い個人的交流があり，29年にはモホリがアールトに自著『材料から建築へ』を贈っている。また特に30年代以降のアールトは，モホリの「機械よりも自然を根底においた，人間らしい建築の正当性の追及」という教示に直接的な影響を受け，その建築観が以後の活動や思想に深みを持たせていることを，ヨーラン・シルツが指摘している。さらにアールトは，建築や家具に木を応用する前段階として，薄板や木材にも至らない木片などを使い，木に内在する特性を見出すための「木の自由実験」に没頭していた記録がある。のちに彼の家具作品の重要モチーフとなる集積材工法は，この期間に作成した木製レリーフが基となり，実現したものである。この一連の「木材実験」への取り組みもまた，『材料から建築へ』の理念からの深い影響がうかがえる。

『材料から建築へ』に見られる，モホリの教育理念やバウハウスでの実践は，先に述べた，ヘルシンキ工科大学における木造建築教育とも類似点が認められる。モホリは著書の最初で，「デザイナーはまず，選び出した材料の構造と感触と製造を徹底的に熟知し，たとえ作業の対象が芸術作品の創造あるいは実用品の制作であっても，生物学的な自然の理法を常に念頭に置かねばならない」と語っており，その方針はまさに，同プログラムの理念へと通じている。モホリのバウハウス教育と現在のフィンランドの木造建築教育の間に，直接的な影響や関連性があるのではないか，という仮説をたてるのは，強引なことかもしれない。しかしながら，国も時代も異なる両者の間で，結果的にその理念と実践の仲立ちをした人物，それが，同大学の先輩でもあり，今なお国民建築家としての不動の地位を築くアールトであったと位置づけることは可能だろう。

また，国内の地理歴史を顧みれば，欧州本土で華やいだ建築様式や，木材以外の建築材料に関する高等な知識と技術から，フィンランドが長らく縁遠かった事実は否めない。しかし，だからこそデザイナー自身が特別な愛着をもって木の特性と対峙し，世界の主流に引けをとらない，価値のあるものづくりに努める姿勢そのものが，いつの時代においてもフィンランド人のアイデンティティの現れとして，アールト，そして現在の木造建築教育まで，脈々と受け継がれてきているのではないだろうか。

一方で見方を変えれば，アールトの設計活動において，木造という課題が永続しなかったことは，近代建築における木造の意義について，それ以上の可能性が見出せないという苦悩からの離脱を意味していたのかもしれない，とも推測できる。同時に，現代の教育現場でも，世界中が依然として建築に共通性を求め，より扱いやすい人工素材の使用に傾倒しているなかで，なおも木造建築に固執するだけの説得力のある「木」の利用意義や，よい意味で個性を持った新鮮な作品を打ち出していくことに対する葛藤や苦労の影がうかがえる。だが，両者はともに，国際性，普遍性を最大の価値の一つとする近現代建築の土壌において，なおもフィンランドという国で生まれ育った建築家としての感性や風土性を守り抜こうとしている。それは，伝統的建築や保守主義に立ってのことではない。彼らには，自分たちが生きる時代や世界において，常に進取的であろうとする意志もまた強いのである。現代性と伝統性，国際性と地方性，そして土木と建築，この異質なものの統合，という課題の追求自体に，両者の魅力が，少なくとも大きなチャレンジがあるのだ。